

平山輝男著 『日本語音調の研究』

金田一春彦

一

これは、平山氏によって書かれた日本語アクセント論である。氏は、昭和十五年に一度、それまでの研究をまとめて好著『全日本アクセントの諸相』を書いておられる。あれは、日本語諸方言のアクセントを全般的に記述した最もまとまった文献として、長く、学界の内外に重んぜられて来たものだった。

しかし、あの後、方言アクセントの研究は、氏等を中心として驚異的な進展を遂げた。この本の巻末に、明治以後の日本語のアクセントに関するすべての研究文献の名が年代順に上っているが、右の『全日本アクセントの諸相』などは、もはやそのごく初めの方に出てくるようになってしまった。その後のアクセントの研究——特に方言のそれについての研究の出たことは夥しいものだった。氏のものだけでも、優に五十篇を越えている。ここらでもう一度、氏によるこの方面の総まとめ的な著述が待たれていたところだった。この意味で出るべきものが著者にその人を得て出たという感じの書である。

今度この本を開いて感じられることは、氏の記述は、現在の諸方言だけにとどまらず、文献の渉獵による古代の日本語アクセン

トの考察にまで手を延ばしておられることである。特に、一八ページに初まって約八〇ページに亘る、『類聚名義抄』『補忘記』のアクセントの発表は、従来出なかつた詳しいものである。これは尊重すべき文献である。が、この本全体を通しての印象は、やはり現代諸方言のアクセントに重点が置かれており、氏の抱懐される日本語諸方言アクセント論を聞く概がある。生彩のあるのは、何と言つても丹念な方言アクセントの調査事実の報告、ならびに調査方法に関する論考である。その意味では、これは旧著の『全日本アクセントの諸相』の増訂版と言える。

ただし、この本は単に、「旧著の増訂版」と言つてそれで済むものではない。旧著はB6版三五〇ページの程よくまとまったものだった。今度のこの本はA5版七〇〇ページであるから非常に増補である。大変なお骨折りだった。

二

この本を開いてまず驚かされるのは、巻頭の『全日本アクセント分布図』である。そこには、本州・四国・九州・北海道および琉球のほかに、東京式アクセントの地方として、もう一つ魚の尻尾の形をした地方があがっている。見覚えのある地形だと思ふの

も道理、それはなつかしき旧領土カラフトである。

この本は、外国人の読者も予想したらしく、巻末に英訳の摘要がのっている。平山氏はカラフトの日本領有を海外に向って宣揚している、と錯覚しそであるが、そうではない。氏には、カラフトを日本地図から抹殺しきれない思い出があるのだ。

私の記憶によると、昭和十一年のこと、氏は、九州の鹿児島地方の阿克セントの精密な調査を完成されるや、その足で日本を縦断し、中国・近畿・中部・関東と東上し、ついでのことと奥羽から北海道へ渡り、さらにカラフトへ足をのびされた。日本各地の阿克セントの大体の輪郭をつかもうとされたのだ。その意味で最後のカラフトまでと志されたのだから、入口の大泊や豊原では満足されない。北の終着駅、旧名シスカまで行かれたというのだが、季節はなんと真冬だったというのだから、勇壮と言えば勇壮、無謀といえは無謀な話である。

しかし、氏がシスカまで行って見たところ、まだその北に部落があることがわかった。もちろんそんなところに乗物があるはずはない。しかし、日本全国の阿克セントを調べるとなれば、そこも調べなければ北をきわめたとは言えぬ。そこで氏は翌朝、敢然と旅仕度——と言っても持物は弁当と阿克セント採集簿だけであるが——旅仕度をととのえ、天ざらい降りしぶく吹雪の中を、氏の口吻を借りると「聖戦」と心得、もし雪の原で倒れば「阿克セント研究万才」とさげんで倒れる決心で、早朝旅立ったというから悲壮である。ふだんなら、えさを探して現れるカラフト熊も、氏の勇姿におじけ付いて穴から出かねたにちがいない。

ところで、氏はそのような雪の中を、行けども行けども部落ら

しいところへは出ればこそ、北地の冬の日は暮れやすく、帰り道は心細くなる。ついに万斛の恨みをのんで空しく引き返して来たが、あとで詳しいことをシスカの町で聞いてみると、平山氏のたずねられた最北の部落は、夏場だけシスカから労働に出る人が作る部落で、平山氏のたずねる厳冬のころには、ないはずだった。そう言えば、ひるごろ、たどりついたあたりに、何か無人のほったて小屋らしいものが何軒か立っていたところがあつたが、さては、あれがそうだったかと気付かれたというが、あるいは一足か二足は、北緯五十度の線を越えてロシヤ領まで入って、また引返して来たのではなからうか、と、これはあとで話を聞いた私どもの想像であつた。

この本の巻頭にカラフトの地図が添えてあるのは恐らくその時の記念であろうというのも、あわせて私の想像であるが、とにかく、行程千里余りのこの大旅行で、氏は、全日本における阿克セント分布の大勢をつかみえ、今日の、全国足跡至らざるなしという実地調査の見とおしを立てられたのは、学界のため慶賀すべきことだった。

三

一体、日本の方言学界で、大規模な臨地調査をした人としては、戦前は、柳田国男・宮良当壮・藤原与一の三氏の名が高かった。が、昭和三十三年の現在の学界では、平山輝男氏をもって、第一位としなければならぬ。この本の後編を見ると、北海道・奥羽・四国三地方の地図に、夥しい調査地点の数が示され、その阿克セントが報告されているが、踏査地点の数は二千六百に及ぶという

から、けっしてここにあげられた地方にとどまらない。この本にはたまたま述べられていない、関東・中部・近畿・中国・九州の各地にも、少くともこれと同等に細かく、ところによっては、例えば、北陸・九州のごとき、これらの地方より、もっと細かく調査地点をえらんで採訪されたことを忘れてはならない。つまり、この本は——一般にはずいぶん詳しいことを細々と書いた本だととれるかもしれないが、これでも氏のアクセント研究の要約にすぎない。ここに掲げられている氏の所説には、この本に見えない、非常に多くの市町村におけるアクセント調査の結果が、背後の資料として厳然とひかえていることを思うべきである。

しかも、平山氏の畏敬すべきは、調査地点が多いということだけではない。辺境の、調査きわめて困難な地点をもれなく調査している、ということである。北海道の調査地点図をひろげてみると、島では、奥尻というところと、杓形というところと、二地点が調査済みになっている。氏はこの本の中で、特にこの島の調査の困難さを口にしておられないから、人は、この島の調査も、函館や札幌の調査と大して変らないと思われるかもしれない。とんでもないことである。

私はかつて、伊豆七島へ方言調査に出掛けたことがある。最寄りの大島は、一日一回舟便があるから何でもないが、次の利島へ行こうとして驚いた。何と五日に一回しか舟が行かない。その島へ一度上陸したら最後、五日間はどうしても島で暮らさなければならぬのである。それも予定どおり五日目に舟が来てくれればいいが、一旦シケにでもなったら半月やひと月は、舟が来ないことも覚悟しなければならぬ。東京のすぐ近くの島でも、なおか

つそんなふうである。辺地の離れ島の不便さはどんなであろうか。推察にあまりある。そういう島一つを調査する時間・費用・労力があつたら、平野地方の五十地点や六十地点は朝飯前に調査できるはずである。

氏は、そういう、ほかの人の行きたがらぬ辺地・離れ島を進んで採訪された。この本には発表されていないが、例えば、九州の五島列島の島々をも氏はつぶさに歴訪されている。もちろんこういう島のアクセントは、時には思いがけないアクセントの変異を示す。その時には、波と風にもまれて島に渡った甲斐もある。が、そういうことはいつも期待してはいけない。現に平山氏が渡った九州の五島列島などは、どこまで行っても、平凡な一型アクセントが行われているにすぎなかった。北海道の島も同様に北海道陸地に対して何等異色を示さなかつたようである。

平山氏は、恐らく島へ亘る以前に、内地でそこ出身の人にあつて、そのアクセントの大体の傾向はつかんでいたに相違ない。「大して変わったこともなさそうだ。しかし、「もしかしたら、ちがつっているかもしれない」とも思う。この「もしかしたら」のために、氏はニシンの油の臭いのする舟に乗込まれた。そうしてその「もしかしたら」が杞憂にすぎなかつたことを確かめて、満足して帰って来られたのである。ここに氏の研究態度がよく現れている。△自分でそその地を踏んでたしかめたことしか書かないという態度、これは氏のこれまでの研究に一貫して見られる特色であり、この本の全巻に流れている最大の強みである。

私が、氏に尊敬の気持を捧げるのは、何よりもこの氏の行き方である。氏が、試みられなかつたら、何人がそういう非能率的な

調査をするだろうか。その場合、永久にわれ／＼は「もしかしたら」の不安をいだいていなければならぬ。しかも、氏はそういう調査に対して、一言も大変だったとも損をしたとも書いていない。愚痴は全然見られぬ。私は、この本を読み、そういう氏の語らない部分の苦勞に対して深い感謝をささげなければならぬと思う。

四

氏の調査の大変だったことはもう一つある。氏にあっては調査の目的は、主としてちがったアクセント体系の境界線の発見にあった。これが東条先生の方言区画説に貢献した功績は絶大である。しかも氏が最も力を入れたのは、方言境界線の中でも、一型アクセント地帯と、東京や京都・大阪のような多型アクセント地帯との境界線であった。

一型アクセントと、多型アクセントとの境界線の調査——これは言うにやすく、行なうに難い仕事である。東京式のようなアクセントと京阪式のようなアクセントの地方の境界線を探ることならば、これは簡単だ。甲の村へ行って「橋」と「箸」を言わせ、乙の村で「橋」と「箸」を言わせるぐらいではぼ見当がつく。ところが一方が一型アクセントだとすると、こうはいかない。被調査者も、「私の方では『箸』と『橋』も区別はありません」「『雨』と『飴』も区別ありません」などと進んで言ってくれば文句はない。今ぐらいアクセントの知識が進んでいればそういう被調査者も出てくるであろう。が、ついこの間まではそう簡単には行かなかつた。調査者が「箸」と「橋」と何かちがいませんか、

とたずねると、たいていの被調査者は、聞かれる以上は何か区別がありはしないか、と考えこんでしまう。それを、あらゆる資料を集めて検討し、最後に「これは一型アクセントだ」と断定するためにきわめて綿密な調査が必要である。

なお悪いことには、一型アクセントと隣り合っているような多型アクセントは、同じ多型と言つても、しば／＼型の区別が不明瞭な曖昧アクセントである。「曖昧アクセント」——この名は平山氏の命名であり、その存在は平山氏の苦心の発見になるものであるが、この曖昧アクセントぐらい調査者泣かせの方言はない。「箸」と「橋」の区別は？ とたずねると、被調査者は、さあ、

と言つて、あるような、ないような返事をする。同じ語を二度言わせてみると、前とちがう音調で答える。しかも、こういう地方では個人差が烈しくて、一人や二人の被調査者を調べただけでは信用ができぬ。そうしてこの曖昧アクセントのうちには、一型アクセントと紙一重というのものもある。ざつと調べた印象では、一型アクセントかと思う方言で、よほど腰を落着けて詳しく調べると曖昧アクセントであることがわかるような例も稀ではない。かつて和田実氏が「十五分間で方言アクセントを調べる法」とかいうのを発表されたことがあるが、曖昧アクセント方言についてだけはこの方法は無効である。こういう方言地帯と一型アクセント地帯とを色分けすることは、実に困難きわまる仕事であった。

苦しいことはまだある。こういう地帯では調査をしていて実際に張合いがいいことだ。東京式と京都・大阪式との境界線地帯などと、実にアクセントに対する人の感覚がきわめて鋭敏である。調査者が聞きもしない前から、調査者の方から、この村では「箸」

を「ハシ」と言いますが、東の村は「ハシ」と言いますよ、北の村も「ハシ」ですが、南の村は東の村と同じように「ハシ」と言います、などと教えてくれる。その報告はしばしば正確で、調査は非常に能率がある。ところが、一型アクセントの周辺地区においては、絶対にそのようなことが望めない。しかも、被調査者は、多くの場合アクセント調査に対して甚だ非協力的である。

これは考えてみれば無理もないことである。自分たちはアクセントの区別なしで日常何の不自由もなく生活している。そういう人が「橋」と「箸」、「雨」と「館」のような二つの語のちがいを二十組ばかり聞かれて何の面白いことがあるか。東京という土地ではそういうものの区別があるのだ、と聞かされても、ほんとうには納得がゆかないにちがいない。アクセントについての全国的な視野をもたぬ素朴な被調査者たちの中には、平山氏の調査を受けて、何という無意味なことをしに来た閑人だろうと思った人も多かったことと思われる。

この点では曖昧アクセントの被調査者たちも変りばえはないはずである。はっきり区別していない「箸」と「橋」、「雨」と「館」の区別をしつこく聞かれたら、さぞ苦しかったことであろう。そうして、なお悪いことに自分たちの頭の中の型の区別が不明瞭であればあるだけに、日本語のアクセントなるものも、すべてそんな程度のものだと思っているにちがいない。そのようなたよりはやはり、平山氏の調査を高く買わず、冷い目で見送ったにちがいない。

私はこの本に書かれた巻頭の地図を——特に一型アクセント分

布領域の輪郭を見るにつけ、平山氏がその至るところで遭遇した調査の苦しさを思わないではいられない。

昭和十何年ごろ、東条先生は学界展望の中で「平山・金田一両氏の方言アクセントの調査は着々進んでいて……」などと書いて、よく平山氏と私の名を並べてくださったものだった。が、あれは私の方が大分割どくをした。私は境界線を踏査したのは関東平野の一部だけである。はからずも、ここで一型アクセントにぶつかり、曖昧アクセントにぶつかって悲鳴をあげた。以後は、もっぱらアクセントの系統を研究の資料をとるためだったので、多少詳しく調べた地方は、近畿を中心とした、いずれも型の区別ははっきりしている地方で、調査ははなはだ容易だった。こういう地域は私が調べなくても、誰かが調べてくれるにきまっている。平山氏の調査した地域に至っては、平山氏がいなかったら、今でもその大部分は、学界に不明のままに残されているのではなからうか。平山氏の方言調査の業績の大きいことを、これ以上に雄弁に物語る事実はない。

五

平山氏のこの本は、平山氏のそういう研究の成果である。この本については、柴田武氏その他の人によつて、すでにいくつか書評が書かれている。その中には、「全体の構成ががっちりしていない」「巻頭の理論篇があとの資料篇に比して弱い」等、等の不満が洩らされている。これは、もっともである。私もそう思う。が、平山氏に代つてちよつと弁明したい気持も起こる。

平山氏は、実は十二年も前に、やはりこれと同じような内容を

もった原稿を書き上げておられた。ところが、それが本になって出る寸前に、空襲のため焼いてしまわれた。

氏の別著『九州方言音調の研究』の序文によると、それは二二〇ページあまりあったというから、この本よりもっと浩瀚なものだった。しかもその折別に保管してあった調査資料まで灰にしてしまわれたというのだから、氏の被害はなみ大抵ではなかった。氏はそれにもめげず、終戦後再び資料を整備され、今日のこの大著を編まれるに至ったのである。その熱意と根気とは、ほとほと頭が下る思いがする。

ここで私は思う。氏が今日ここに至るまでには、氏の頭には、ともすれば日の目を見ずに終った大著の記憶がよみがえり、氏を悲しませ苦しめたことだろう。そういう場合、全く同じような内容の本をもう一度作るうとするのできる人は、ふつうの人間ではない。忘れ物をしてとりに戻るので、同じ道を歩くのは苦痛である。前に自分が持っていたが、なくしてしまったというような本は、必要があってもなかなか買にくい。私の想像では、焼失した氏の大著は、今のこの本よりもっと構成のがっちりしたものだ。氏が再び資料の収集を完成された時に、氏はなるべく旧版とはちがった本にしようと思図されたにちがいない。あるいは、少しでもままとまったら今度は活字にしておこうと考えられたかもしれない。

後篇に入るべきもののうち、氏は九州方言のアクセントに関する考察だけは別の本として先に出してしまわれた。これなどもその気持の現れであろう。また、何より氏は、当然書かれると予想されるこの本の序文に、焼失した原稿について一言も触れておら

れない。これなど、もはや過去の不運を忘れようと言われた気持がはたらいたのではなからうか。

今度の本で、資料篇である後篇が、北海道方言の研究と四国方言の研究とから出来ていることは、それだけ見たのでは、諒解に苦しむほかはない。この二方言は、必ずしも前篇に説かれた平山氏のアクセントをよく証明する方言だとは言えないからだ。また、巻末の方言学界的展望も、なぜ昭和二十八年のことばかり詳しいのか、不審が起る。このあたり、論考としての構成はたしかに弱い。しかし、平山氏は、北陸方言以下の方言についての考察は、別冊として世に問うことを約束しておられる。また、氏が『音声学協会会報』その他に発表しておられる論文その他で、氏は全国ほとんどすべての方言について発表しておられる。この本に盛られたのはたしかに氏の日本語アクセント論のほんの一斑である。が、これは氏が他に発表された論文や、これから出そうと計画しておられる続編を併せもつことによって、氏のアクセント学の全貌に接することができると考えるべきであろう。

この本の序文を読むと、氏はこの本の構成がきわめて有機的に出来たと思っておられるかのように書いてある。しかし氏がほんとうにそう考えていると解しては氏にとって迷惑であろう。この文章は、とにかく本が出来たことに対する氏の喜びの表明であり、転じてこの本の実現に力を尽された出版者への思いやりの言葉と受取るのがいいと思う。

また、氏のこの本の理論篇が食いたらないということ。私もこの意見に一往同感である。が、恐らく氏は、こんな意見をもっておられるのではないか。△アクセントの本質とかアクセントの型

とは何かとか言ったって、それはその人の解釈のし方でいろいろに変わる。どのアクセント観がいいか、というようなことは、自然にたくさんの方言に接しているうちに分かってくる。とすると、急いで独自のものを発表しないでもいいのではないか。他の学者の意見はその本を見るがよろしい。とにかく自分は、誰が見ても動かない客観的な事実を報告しておこう✓と。私はこの行き方が嬉しい。

氏の強み、この本の強みは、前にも述べたが、自分でほんとうに確かめたことしか言わないとする態度である。この本は、最初にふれたように、方言のアクセントだけを扱ったものではない。過去の文献の記載をもとにしての、古代・近代の日本語のアクセントに関する考察をも行なっておられる。そういう場合、いかにも自分で確かめられたというあとが見られて、これは本格的な研究をしておられるのだなとわかることがある。例えば、『類聚義抄』時代における「死ぬ」という動詞のアクセントを、他のすべての同類の動詞とはちがえて上上型と表記しておられるところなど、その一例である。

こんな風だから、たまにもされる氏の理論的な考察は、まことに事実即したまともなものである。この本にも見られる一型アクセントや曖昧アクセントに関する論などはそれである。「曖昧アクセント」というようなものは、その実物に接しないで、平山氏の論だけ読んでいると、そんなアクセント体系があるだろうかと疑いたくなるかもしれぬ。が、百聞は一見に如かない。その証拠に、中沢政雄氏は、平山氏の研究と全く独立に群馬県下の曖昧アクセントの調査を行われ、その結果において、平山氏と全く

同じ見解に到達された（雑誌「季刊国語」昭和二十三年春季号所載の「邑楽弁の研究」）。

柴田武氏も賛成されたが、氏の持論、日本語のアクセントは、このままほうっておくと、型の区別が段々薄れて行って、ついにのっぺらぼうの一型アクセントになってしまう——これも、あまで証拠をあげられては、反駁の余地がない。

六

氏の、このような学風を反映して、この本には内容に比して其独特の術語の数はきわめて少い。これはこの本の内容の豊富なことに対比して、また今の学界の進歩に比して注目すべきことである。ただわずかに、反省的型・音調基の目・下り目・基本節・派生節・仮定音節など、ほんの幾つかの術語が見られるにすぎない。柴田氏は、そういう術語の意味をもっとはっきり聞きたいと言われた。もっともなことである。平山氏の解説は、ちょっと簡単にすぎた。

私には、平山氏の意のあるところが大体わかるような気がする。新しい概念のとらえ方などにはなかなか苦心のあとが見える。平山氏は、術語の詳しい説明というようなことはあまり好まないようだ。ここで私はこの点に関する註釈者の役を買って、筆をおきたい。

(1) 反省的型 有坂音韻論で「型」と呼ばれたものと大体一致する。

いわゆるていねいな発音において示される高低の姿である。ただし有坂博士はこれを音韻論的概念とされたのを、平山氏は厳密な意味では音声学的概念だと断っておられる。これは、服部

博士の音韻論への敬意を表されてのことで、平山氏としては、そのいずれであるかは重要な問題ではないであろう。とにかく、服部音韻論における音韻論的解釈と有坂音韻論における音韻論的解釈とを両方並べてあげる点が、平山音韻論の大きな特色である。

このうち、反省的型は、服部音韻論にはない概念であるが、平山氏がこれを立てられたことはよかつたと思う。平山氏が全方言のアクセントについて型の種類などを適確に捕え、また一型アクセント、曖昧アクセントをえり分けることに成功されたことは、第一に反省的型という武器のおかげだった。

もしこの反省的型という概念がない場合、未知の方言アクセントの研究がいかに困難をきわめるか。例えば、『三重県方言』の第一輯に、杉浦茂夫氏の「南牟婁郡木本町のアクセント」という論文がのっている。これは、「従来のアクセント研究は、音韻論の見方において欠陥があった、望ましい方法は……」という新進らしい意気込みで、同方言のアクセントを考察したものである。が、結論において、同方言に何個の型があるかについてさえはつきりしたことが言えずに終っている。これを讀んでまず感じることは、もし、杉浦氏が「反省的型」にあたる概念をもって対したら、少くとも型の数ぐらひは簡単にかむことができたろうということである。

この「反省的型」は、平山氏も多くの方言アクセントに接しているうちに、どうしても設定しなくてはならないという必要に迫られて設定された概念であろうと想像する。

(2) 音調基およびその目 六べおよび二五べの記述によって、「型

知覚」を使用者に与え、基本節をまとめる力」のことと知られる。服部博士の \wedge アクセント素 \vee に近い概念であるが、いわゆる平板一型は、型知覚なし、として音調基と認めない点、注意される。つまり、東京アクセントのような型の区別のあるアクセント体系においては、すべての型は音調基をもち、これに対して平板一型のサクラのようなアクセントは、型知覚なし、という意味で音調基なし、ということになる。

不思議なのは各論の中にこの術語の用例がほとんど見られないことである。思うに、この術語は、服部音韻論の影響のもとに設定されたもので、氏のアクセント論の体系では、不要な術語なのではないだろうか。「型知覚」という言葉はいい言葉で、これは術語としてもっと活用されていい。

(3) 基本節と派生節 これは名前が変っただけで特異というものではない。神保先生の \wedge 準アクセント \vee の概念で説明すれば、「基本節」は、アクセントが一定している文節または語のことであり、「派生節」は、準アクセントをもつ文節または語のことである。平山氏は各論で、派生節の準アクセントをもとにして、語の型を決定していく。この態度は、柴田氏とは最も対照的であるが、これはこれで首尾一貫して、けっこうである。私もタキの決定には、氏と同じような方法をとる。

(4) さがり目 宮田幸一氏が \wedge タキ \vee と言われたものをさす。服部博士の \wedge 核 \vee という語を使えば、核の直後にある声の降下のことである。京都・大阪アクセントに、語頭のさがり目を認められる行き方は、私の言う \wedge 語頭のタキ \vee という考えを採用されたものと言われる。ただし、京都・大阪方言の「雨」「猿」の

類に対し、第二音節の途中に△さがり目▽が来ると言われ、△音韻論的解釈▽で「葉」などの第二音節とはちがうものと取扱われるのは、平山氏の創説で注目される。これは言われてみれば、私も賛成である。京都方言などでは、「朝も」は「麻も」や「葉」と異なり、サの途中でタキが現れる。この意味で、2・5という小数点を使った呼び名も合理的である。

なお、型を番号で呼ぶ場合の0123……には、氏は新案を出しておられるが、これはちよつとまずくはないか。この見方では、1以下の番号はさがり目の位置を表わすに對し、0はさがり目の有無を表わす。一方は序数詞としての用法、一方は量数詞としての用法である。これは私が『明解国語辞典』で試みた方法と同じ趣旨であるが、川上蓼氏にその矛盾を突かれて降参した。実用としては0123……がいいが、学問の上では、川上氏の言われるように、平板式は∞の合理的なのになわなわい。川上案を採用すると、0は語頭のさがり目を表すことになり、例えば東京アクセントで0から2へ飛ぶ無理もなくなり、全体がしっくりいくのではないか。

(5) 仮定音節 おもしろい術語である。例えば山梨県奈良田方言で、「山」という語は、ヤマであるが、一音節の助詞がつくとヤマガ・ヤマオとなり、しかも、ガ・オのあとに必ずタキがある。それを表わすために、「山」だけを表記する場合に、△○○△と記述して、あとに一音節分高い音が来るぞということを示す。この場合の△が「仮定音節」である。

右の説明ではちよつと足りない部分がある。この方言では、「山」に二音節の助詞がつくと、ヤマカラ・ヤマデワとなつて、

必ず第一音節の直後にタキが現れ、「山見る」「山越える」のようないわゆる△派生節▽を作つた場合も、ヤマミル・ヤマコエルとなる。こんなふうで、この方言の使用者が「山」という語を単独で発音する場合には、次に来るものの第一音節のあとで必ず下がる予定だという気構えが出来ることと想像される。

このようなアクセントに對し、平山氏がこのような音韻論的解釈を試みたことにはまことに有意義であり、しかも、この解釈は最上と思う。東京の「山」という語のアクセントを記述する場合に、単に低高型とせず、「○○型」のように、核ないしタキがあると認める立場をとる以上は。

服部博士・和田実氏・川上蓼氏あたりだったら、このようなアクセントに對して、どのような音韻論的解釈をくだされるのであろうか、おたずねしてみたい。柴田武氏のような、東京語の「山」の直後にタキを認めない行き方では、これは形態音韻論上の問題であり、音韻論的解釈では問題にしないですむはずである。

ところで次に問題は、平山氏が同じように仮定音節を以て説明ておられるものの中に、異質のものがありはしないかということである。例えば、鹿児島方言で、「山が」「山は」は、ヤマガ・ヤマワで、たしかにその直後にタキがある。しかし、この方言では「山から」「山には」は、ヤマカラ・ヤマニワとなつてヤマカラ・ヤマニワとはならず、一方「山だ」は、ヤマチャ、「山見る」「山越える」はヤマミル、ヤマコエルとなる。ヤマヂャ・ヤマミル・ヤマコエルではない。そうすると、この方言

で、「山が」「山は」の「が」「は」のあとにタキが来るのは、「が」「は」という助詞の性質からそうなるので、「山」という語としては、必ずしも次の音節のあとにタキを作る性格があるのではないと解する。

私は想像する。鹿児島方言の使用者は、「山」と言った時に、この語の一音節先で音が下るぞという意識はもたず、単に、この語の直後で音が下るんだ、と意識しているのではないだろうか。「山」がヤマ、「山が」がヤマガであるのは、単なるタキの位置の交替であって、奈良田方言の場合とちがうと思う。

せっかくの△仮定音節▽にケチを付けたようなかっこうになったが、私の意図はそうではない。私は△仮定音節▽という新概念を流用することによって、その創設の意味がまぎれてしまいはしないかとちょっと心配になったにすぎない。

以上六項、平山音調論の理解のための一助ともなればと思つて書いた。誤解の点があつたらお許しを乞う。

——名古屋大学助教授——